

大清律輯註考釈（四）

谷 井 俊 仁

要旨 本稿は、清律の律文を沈之奇の註釈『大清律輯註』に即して解釈したものである。沈之奇は清律を体系的に理解しようとしており、その理解をおさえておくことは、中国における法的思维的歴史的展開を解明するための必須の作業である。本号では前号に続き、鬪毆篇良賤相毆律から同姓親屬相毆律までをあつかう。

人命篇謀殺人～戲殺誤殺過失殺傷人

『人文論叢』第16号、1999年

人命篇夫毆死有罪妻妾～同行知有謀害。鬪毆篇鬪毆、保辜限期

『人文論叢』第17号、2000年

鬪毆篇宮内忿争～威力制縛人

『人文論叢』第18号、2001年

三 『大清律輯註』卷二十 刑律鬪毆篇考釈（承前）

12) 良賤相毆

本律では奴婢・雇工人と良人の間の鬪毆をあつかう。奴婢とは、有罪者の男女子が縁坐のため官に隸属させられ（「没官」）、賤役に供せられた者のことを言う（輯註22a, 1-2）。これの本規定は刑律賊盜篇謀反大逆で、謀反大逆をおこした首従犯の15歳以下の男子と母、女子、妻妾、姉妹、および男子の妻妾は、功臣の家に給して奴とする¹。彼らは良民とは異なるので、良賤間の鬪毆は凡人間のとは別扱いにして刑罰を加減する。『大明律附例』で、奴婢を「無罪良民」と同じではないと言っていることからすれば²、奴婢は有罪者である。ただし有罪たるゆえんは、己の積極的犯行ではなく、親、夫などの縁坐という消極的要因に由来する。そこに奴婢が刑罰上特異な位置を占め、時に無罪の良民と同等に扱われる理由がある。たとえば人命篇謀殺故夫父母律輯註では、「奴婢はもとより凡人に係る」と、奴婢とその所有者である家長は、本来的に一般人関係であることをのべる（19, 13b, 8）。すなわち、量刑という観点からすれば、奴婢は消極的な加減要因であって、往々にして他の積極的な加減要因の前に阻却されてしまうのである。

雇工人とは、賃金をもらい人のために働く（「為人執役」）者である。沈註によれば、それが良民と区別されるのは、賃労という「事」が「賤」なのであって、存在である「身」が「賤」だからではない。事と身の最大の相違点は、他者のもとの労働が有期か無期かに存する（22a, 4-6）。前者は雇工人、後者は奴婢であって、雇工人への刑罰加減は奴婢よりさらに消極的となる。なお賤とは本来「身」にかかわる価値概念であるから、雇工人の賤は、普通「主僕に分」とよばれる（第三節小註）³。

第一節 凡奴婢毆良人（或毆或傷或折傷）者加凡人一等。至篤疾者絞（監候）、死者斬（監候）、其良人毆傷他人奴婢（或毆、或傷、或折傷篤疾）者減凡人一等、若死及故殺者絞（監候）、若奴婢自相毆傷殺者各依凡鬪傷殺法、相侵財物者（如盜竊強奪詐欺驅^{1a}騙恐嚇求索之類）、不用此（加減）律（仍以各条凡毆傷殺法坐之）。

順治律・雍正律・乾隆律：1A_i 証につくる。（本律は東京大学東洋文化研究所蔵の康熙本『大清律輯註』に落丁があるので、順治律の校本は、懷効鋒・李俊点校『大清律輯註』法律出版社、1998年による。）

奴婢が良人を殴ると、凡人間の鬪殴より刑罰を一等加えられる。凡人間で篤疾は流三千里、鬪殴殺は絞監候である。名例加減罪例律では、流三千里から絞斬への加等を原則認めていないから、本律で篤疾を絞、鬪殴殺を斬としているのは、刑罰の一等加重を貫徹していることになる。また良人が奴婢を殴るのは凡人間の一等減である。凡人の場合、故殺は斬監候で（人命篇鬪殴及故殺人律）、一等減は加減罪例律によって流三千里のはずであるが、絞監候となっているのは、これも一等減の厳密な適用ということができる。

しかし奴婢が良人と同等の扱いをされる場合がある。良人による鬪殴殺は、減等されずに同じ絞監候である。これについて沈註は、良人が奴婢を殴殺した場合、良人を死刑にするのは、奴婢であっても加害者とは凡人関係だからである、とのべる⁴。奴婢は、良人との間に、国家の正規の構成員であるか否かという観念的認識関係があるだけで、家長との間のような擬制的親属関係をもたない。そのため良人とは凡人関係であるという理解が生じるのである。ここに奴婢の刑罰加減要因としての消極性がある。また沈註は、縁坐のため奴婢の養子となった者が良民の親属と鬪殴した場合は、親属間の鬪殴による、とのべる（21b, 16-17）。この場合、良賤関係と服制関係が競合しているのであり、後者が重視されているのも、良賤関係の消極性を示す。小註で、良賤間の強窃盜は、各条の凡人規定を援用するようのべるのも同様の理由である。『大明律附例』によれば、殴には貴賤の分があるが財にはないからであり⁵、ここでも奴婢の賤民性は分節、解体されてしまっている。

第二節 若殴（内外）總麻小功親之⁶奴婢非折傷勿論。至折傷以上（至篤疾者）各減殺傷 凡人奴婢罪二等、大功（親之奴婢）減三等、至死者（不問總麻小⁷功大功）杖一百徒三年、故殺者絞（監候）、過失殺者各勿論。

明律：aなし。乾隆律：i小功大功は大功小功につくる。

本節から鬪殴篇後半の最大の論点となる親属関係が導入される。ここでは尊長による總麻、小功、大功親の奴婢に対する鬪殴だけがあつかわれ、期親との鬪殴、奴婢による家長親属への鬪殴は次の奴婢毆家長律でのべられる。

親属の所有する奴婢との鬪殴が問題となるのは、それが名分にかかわるからである（輯註22b, 7-8）。ここでいう名分とは良賤関係（貴賤）ではなく、親属の親疎、すなわち服制である。このことはすでに明律の註釈書である『読律瑣言』で説かれており、それによると、他人の奴婢とは貴賤関係があるだけであるが、親属の奴婢とは親属との名分関係が介在してくるという⁸。雍正律総註でも、親属の奴婢には名分があり、他人の奴婢とは異なることをいう⁹。なぜ服制が関係してくるかという、奴婢毆家長律の沈註に「奴婢は義合の人」とある（23b, 5-6）。義合とは、人為的な一体性をあらわす概念で、たとえば夫婦がそれである（後述）。このように奴婢は家長（所有者）と一体化させられるのであり、そのため家長の親属との服制が問題となる。以下、本律と殴大功以下尊長律、奴婢毆家長律、殴大功以下尊長律、殴期親尊長律を比較することによって、奴婢における名分が刑罰上どの程度評価されているのかを検討する（表一、二。刑罰は『輯註』、雍正律総類による）。

表一

傷 害 闘 殴	折傷未満	折傷以上	篤 疾	闘 殴 殺	故 殺
良人殴奴婢	減凡闘一等	減凡闘一等	減凡闘一等	絞監候	絞監候
良人殴總麻卑幼	勿論	減凡闘一等	減凡闘一等	絞監候・流三千里	絞監候
良人殴總麻親奴婢	勿論	減凡闘三等	減凡闘三等	徒三年	絞監候
良人殴小功卑幼	勿論	減凡闘二等	減凡闘二等	絞監候・流三千里	絞監候
良人殴小功親奴婢	勿論	減凡闘三等	減凡闘三等	徒三年	絞監候
良人殴大功卑幼	勿論	減凡闘三等	減凡闘三等	絞監候・流三千里	絞監候
良人殴大功親奴婢	勿論	減凡闘四等	減凡闘四等	徒三年	絞監候
良人殴期親卑幼・外孫	勿論	勿論	勿論	徒三年	流二千里
良人殴期親奴婢	勿論	勿論	勿論	杖一百・徒一年	徒一年
良人殴子孫	勿論	勿論	勿論	杖一百	徒一年
家長殴奴婢	勿論	勿論	勿論	杖一百・徒一年	徒一年

表二

奴婢殴良人	加凡闘一等	加凡闘一等	絞監候	斬監候	斬
良人殴總麻尊長	杖一百・徒一年	加凡闘一等	絞立決・絞監候	斬立決・斬監候	斬立決・斬監候
奴婢殴家長總麻親	徒一年	加凡闘二等	絞	斬監候	斬監候
良人殴小功尊長	徒一年・徒一年半	加凡闘二等	絞立決・絞監候	斬立決・斬監候	斬立決・斬監候
奴婢殴家長小功親	徒一年半	加凡闘三等	絞	斬監候	斬監候
良人殴大功尊長	徒一年半・徒二年	加凡闘三等	絞立決・絞監候	斬立決・斬監候	斬立決・斬監候
奴婢殴家長大功親	徒二年	加凡闘四等	絞	斬監候	斬監候
良人殴期親尊長・外祖父母	徒二年半・徒三年・徒三年・流二千里	流三千里・絞・流三千里・斬	絞	斬	凌遲処死
奴婢殴家長期親・外祖父母	絞監候・流三千里（為從）、斬監候	斬監候	斬監候	斬	凌遲処死
良人殴祖父母父母	斬	斬	斬	凌遲処死	凌遲処死
奴婢殴家長	斬立決	斬立決	斬立決	凌遲処死	凌遲処死

良賤間の闘殴は、總麻親との闘殴に匹敵することから、刑罰上、良賤制は服制の總麻親相当である。親属の奴婢との闘殴は、さらに服制分の刑罰が加減される。ただし所有親属の尊卑は勘案されない。この加減分が奴婢における名分となるが、それは、奴婢が加害者であるか被害者であるか、および傷害の程度によって異なり、必ずしも評価されているとはいえない。また、そもそも良賤関係自体が刑罰上評価されていない場合すら存する。規定は多様であり一言でまとめ得るものではないが、以下、目だった特徴だけを指摘することにする。

表一（上の者が下の者を殴る場合）によると、折傷未満は良賤関係で減凡闘一等、服制関係

で勿論であるので、むしろ服制関係の方が優先される。また、卑幼親属と卑幼親属の奴婢との間においても、刑罰上の差がないことから、奴婢が加減要因として評価されていないことがわかる。それが評価されるのは折傷以上篤疾以下であるが、期親ではされない。殺害は、故殺で服制が評価されないが、これは故殺の罪状が重いためである（沈註 22a, 3）。また奴婢と期親卑幼とは一貫して同等であり、両者が匹敵する存在として見られていたことを示す。表二（下の者が上の者を殴る場合）でも、期親を除けば、折傷未満、折傷以上で表一と同じことがいえる。篤疾以上になると、良賤間の闘殴がすでに絞監候であるため、刑罰上の差をつけにくく、服制は反映する余地が少ない。本表で目を引くのは、奴婢が家長、家長の期親を殴る場合にはほぼ死罪となることで、刑罰上の独自性が強い。

以上を通観するに、奴婢における名分は總功親と期親以上とで大きく異なる。總功親の奴婢は基本的に凡闘の基準の上で刑罰が加減されており、それが凡人関係の延長として捉えうることを示している。しかし期親以上の親属の奴婢の場合は、刑罰面での独自性が強く、凡人とは異なる関係である。すなわち刑罰面からするならば、奴婢は奴婢家長関係に存在の原基をもち、家長の期親卑幼相当としてとらえられていたといえる。薛允升は『唐明律合編』卷二十二で、唐律では「奴婢はもとより人類に齒せず」であるが、「今は則ち大いに然らず」とのべている⁸。その法理上の理由の一端は、おそらくここに求めることができる。またこの発言には、清朝社会の固有事情があるが、それについては次節でのべる。

第三節 若殴（内外）總麻小功親之^a・雇工人非折傷勿論、至折傷以上（至篤疾者）各減凡人罪一等、大功（親之雇工人）減二等、至死及故殺者（不問總麻小功大功）並絞（監候）、過失殺者各勿論（雇情傭工之人與有罪緣坐為奴婢者不同、然而有主僕之分、故以家長之服属親疎論、不言殴期親雇工人者、下条有家長之期親若外祖父母殴雇工人律也、若他人雇工人当以凡論）。明律：aなし。

雇工人は賃金労働に従事するために、良民と異なるにすぎない。よって雇用期間が終われば雇用者（家長）とは凡人関係である（沈註 22a, 4 - 5）。科刑のパターンは奴婢と類似しているが、加減は奴婢より弱い。たとえば大功親の雇工人は、ほぼ總麻・小功親の奴婢に匹敵する。また奴婢とは違い、良民との闘殴は凡人関係としてあつかわれる（小註）。問題になるのは、親属下の雇工人との闘殴、すなわち名分の問題である。雇工人でも家長との服制が問題となるのは、「蓋し主僕は義は君臣と同じ」（奴婢殴家長律沈註 23b, 9 - 10）というように、家長との一体性が指定されているからである⁹。

雇工人で重要なのは、奴婢との区別である。既にのべたように、奴婢は本来謀反大逆に縁坐した者であって、雇工人とは異なる。しかし日常用語では、雇工人が奴婢といわれる場合がある。この経緯については沈註が詳しい（21a, 7 - 21b, 3）。

奴婢とは、有罪で縁坐した者が功臣の家に与えられたのであり、常人の家にはいるはずがない。思うに、祖父・父が子・孫を売り飛ばして奴婢とした場合は、罪を問ひ親属と一緒にしてやる。彼らは無罪の良人なのであるから、祖父・父であっても、子・孫を売り飛ばして賤民とすることはできない。以上からすれば、常人で労働に服するのは、雇工人であって奴婢ではありえない。よって現在、身売り契約を結ぶ場合、奴や婢と書かず、義男義女と書くのは、奴婢にはできないということを意味している。しかし現在、問刑衙門で、身売りして士民の家にいる者をおしなべて奴婢とみなしているのは、このことを考慮しないものである¹⁰。

しかし、奴婢という言葉の法的意味と日常的意味との厳格な区別は、清朝社会の現実の前に修正を迫られる。すなわち旗人はアハ（aha）とよばれる奴隸をかかえていた¹¹。アハは満洲社会の産物であり、謀反大逆といった明律的論理によって生まれたものではない。ところが、これが律の奴婢に比定されるに至った。康熙本『輯註』には良賤相殴律、奴婢毆家長律の条例をのせないが、乾隆本『輯註』には八本の条例をのせる。それらを検討すると、奴婢なる語は三本の条例にみえ、二つは明らかにアハに関する規定である¹²。アハは略取や売買、投充によって旗人の下に入った。つまり清朝において奴婢とは、明代のように特別な存在ではなく、ありふれた存在となったのである。

『大清律輯註』は清初に成立し、かつ明律の註釈の影響を多大に受けているので、奴婢について厳格な議論をしているが、これは、明清革命といった社会変化の前ではむしろ硬直した原則論である。旗人は人を買ってアハにするが、漢人は奴婢を売買できないので、義男義女を売買する、というのでは法理と現実が乖離しており、満漢一視の政治方針にも反する。そこで法的原則と社会の現実との折衷策として出てきたのが奴僕（家奴）概念で、アハに相当する存在が漢人においても認められることになった。順治律では、良賤相殴・奴婢毆家長の律文、輯註、沈註ともに、奴婢という語だけが使われており、奴僕という語はみえない。ところが康熙年間にはその語が使われるようになり、雍正律では条例にあらわれる¹³。ここにおいて問題となるのは、奴僕の法的な定義である。奴婢と雇工人には厳格な法的定義が存在する。しかし、奴僕は日常用語でありそれを欠いていた。そこで出てきたのが雍正律奴婢毆家長律の第三欽定例である。①漢人の家で生まれた奴僕、②公的な契約で売買された奴僕、③雍正五年以前に私的に売買された者、④みずから投充してきて養育の年月の長い者、⑤婢女で結婚させられ子供を産んだ者、これらは「家奴」であり、子々孫々まで永遠に服役し、婚姻は家長の差配による。またこれらを家長は官に届出をすることとし、以後、奴僕を新たに手に入れる場合は、契約書を立て官から認めてもらわなくてはならないこととなった¹⁴。それにともない用語の整理も進展し、雍正律の奴婢毆家長律第一欽定例「凡官員將奴婢責打身死者……」の官員が、乾隆本『輯註』では旗員に改められ、同じく第二欽定例「凡八旗官員平人將奴僕責打身死者……」の奴僕が奴婢に改められた。ここにおいて清律における良賤関係は、謀反大逆の縁坐による奴婢、満洲人下の奴婢（アハ）、漢人下の奴僕、雇工人の四つに拡大することになった。ただし奴僕はアハとの類縁性から生まれたものである以上、それは満洲の主従関係の延長でとらえられ、刑罰は満洲主僕、満洲家人の例に即して科された¹⁵。また、奴婢、奴僕の法概念上の区別はその後浸透せず、日常用語としての奴婢が並存し続けることになる¹⁶。

13) 奴婢毆家長

本律と妻妾毆夫律は、義合、すなわち人為的に親属に比擬された関係にある者の間の闘殴をあつかう。ここでは、奴婢、雇工人が家長およびその親属を殴った場合と、家長、家長の期親が奴婢、雇工人を殴った場合を規定する。良人と奴婢・雇工人間の闘殴、および家長の総麻、小功、大功親が奴婢、雇工人を殴った場合は、前の律であつかっているので、本律をもって奴婢、雇工人の闘殴問題は完結する。ただし奴婢・雇工人は第一に家長に隷属するものであるから、家長との闘殴がこの二つの律の出発点をなす。

第一節 凡奴婢毆家長者（有傷無傷預毆之奴婢不分首從）皆斬、殺者（故殺毆殺預毆之奴婢不

分首従）皆凌遲處死。過失殺者絞（監候、過失）傷者杖一百¹流三千里（不²収贖）、若奴³婢毆家長之（尊卑）期親及外祖父母者（即¹無傷亦）絞（監候、為從減一等）、傷者（預毆之奴婢不問首従重輕）皆斬（監候）、過失殺者減毆罪二等、（過失）傷者又減一等、故殺者（預毆之奴婢）皆凌遲處死、毆家長之總麻親（兼内外尊卑、但毆即坐、雖傷亦³）杖六十徒一年、小功杖七十徒一年半、大功杖八十徒二年、折傷以上、總麻加毆良人罪一等、小功加二等、大功加三等、加者加入於死（但絞不斬、一毆一傷各依本法）、死者（預毆奴婢）皆斬（故殺亦皆斬ⁱⁱ）。

明律：a 奴婢なし。順治律：1 小註（不収贖）あり。2 小註なし。3 同あり。乾隆律：i 及につくる。ii 監候あり。（本律も前律同様、順治律の校本は点校本『大清律輯註』による。）

奴婢は、たとえ傷害を与えなくても、家長に殴りかかりさえすれば斬立決である。この段階ですでに五刑の最高刑が科され、殺害時に凌遲処死となる。これは子孫が祖父母父母を、妻妾が夫の祖父母父母を殴った場合と同じ科刑方法である（鬪毆篇毆祖父母父母律）。刑罰上、奴婢は家長の子孫相当だといえることができる。

これほどまで刑罰が重く設定されている理由について、輯註は「悖逆甚だし」というだけであるが（25a, 1）、沈註は家長と奴婢との関係に踏み込んで説明する。すなわち子孫は祖父母父母に対し「天属之親」であるのに対し、奴婢は家長に対し「義合之人」である（23b, 4-6）。義合とは、義にもとづいての結合で、名例律十惡不義の輯註に、「部属、師生、夫婦はもとより天合に非ず、義を以てあい維ぐ」とあるように、人為的な一体性を説明する概念である。家長奴婢間の義は、謀反大逆への縁坐を契機として結ばれる。刑律賊盜篇謀反大逆律の輯註によると、謀反大逆は、天に逆らい罪が大きいので、その親属にも刑罰が及ぶ。十五歳以下の男子、母、妻などは判断力（「知識」）がないので、死を免じ功臣の家に給して奴婢にするという¹⁷。しかしこの説明では、両者の間にどのような義が結ばれるのかは判然としない。

功臣・縁坐者間の義については、人命篇謀殺故夫父母律の輯註が参考になる。

奴婢は、本来家長と凡人関係であり、ただ名分の関係で重視されるのである。これは子孫の比ではない。よって他人に転売し、身価を得たなら、名分はなくなり、恩義は絶たれることになる。両者が凡人関係でなくて何であろうか¹⁸。

すなわち義とは恩義である。恩とは養育にかかわる概念で¹⁹、謀反大逆に縁坐した者は、死罪を免じられて功臣に給付され、そこで養育を受けるが故に恩義がある。よって恩義にもとづいて結ばれた功臣と縁坐者が家長、奴婢であるとひとまずは言える。しかしこの理解では、輯註で強調している名分の要素が落ちている。功臣縁坐者間に累積された個別具体的な恩義の事実行為が集約結晶化し、「名分」という結合形式として定式化された時、はじめて功臣と縁坐者は家長奴婢と呼びうるのであって、家長奴婢という称呼、具体的な恩義行為、結合形式は、三位一体である。

名分については訴訟篇干名犯義律が参考になる。この律は子孫が祖父母父母を告訴した場合の処罰規定で、奴婢が家長を告訴した場合もあつかわれている。その輯註に「名は名分の尊さ、義は恩義の重さであって、子は父母、孫は祖父母、妻妾は夫、夫の祖父母父母との間に名分、恩義が非常に尊く重い」とある²⁰。ここで重要なのは、恩義が名分、すなわち服制と一体に理解されている点である。しかし縁坐者は、功臣と本来凡人関係で服制はないのであるから、服制が人為的に比擬されなくてはならない。そこで与えられたのが祖父母父母—子孫関係である。本節で奴婢が子孫相当の刑罰を科されているのはまさにそれを表している。人命篇謀殺祖父母父母律でも、奴婢が家長を謀殺すれば「罪與子孫同」という。「罪、子孫と同じ」とは、奴婢

による家長の謀殺は、罪状が子孫による祖父母父母の謀殺と似ており、刑罰を子孫と同じく科す、という意味である²¹。つまり、本来凡人である縁坐者は、功臣に対し養育の恩義によって子孫相当の関係づけを与えられる。『読律瑣言』人命篇謀殺祖父母父母律でも、「奴婢は倫理無しといえども、名分の重さは則ち子孫と異ならず」という²²。これが縁坐者、功臣の義合であって、このとき両者は奴婢、家長と呼ばれるのである。

よって奴婢家長関係の根本を規定しているのは、謀反大逆への縁坐ではない。縁坐はあくまでも奴婢家長関係形成の契機にすぎない。むしろ決定的なのは、その後の恩義であり、子孫相当の関係づけである。そう考えて始めて奴婢家長関係がアハ旗人関係に拡張しうることが理解される。また、恩義は個別的事実行為であり、子孫相当の関係づけも属人的性格をもつのであるから、奴婢家長関係は人格的結合の一種と考えなくてはならない。『大明律附例』は奴婢家長関係を人合という語で表現している²³。これは天合の対概念ではあるが、義合より奴婢家長関係のもつ個別具体的な人と人との結合という側面を強調していると言えよう。

第二節 若雇工人毆家長及家長^a期親若外祖父母者（即無傷亦）杖一百徒三年、傷者（不問重輕）杖一百流三千里、折傷者絞（監候）、死者斬（毆家長斬^{1A}決、毆家長期親若外祖父母斬²監候）、故殺者凌遲處死³、過失殺傷者各減本殺傷罪二等、毆家長之總麻親杖八十、小功杖九十、大功杖一百、傷重至內損吐血以上、總麻小功加凡人罪一等、大功加二等（罪止杖一百流三千里）、死者各斬（監候）。

明律：a之あり。順治律：1斬決は決斬につくる。2斬監候は監候斬につくる。3小註（決）あり。雍正律：A斬決は決斬につくる。

奴婢家長関係の根本が恩義にあったのであるから、雇工人家長関係もそれと同じく考えることができる。ただし雇工人は奴婢より家長の恩義の薄い者であるから、刑罰を減等される。沈註は、「蓋し主僕は義は君臣と同じ」（23b, 9-10）といい、確かに制使・官吏、本属官・部民間のように本管関係にある者との鬪毆と科刑パターンは似ている（鬪毆篇毆制使及本管長官律）。

	毆	傷	折傷以上	鬪毆殺	故殺
雇工人毆家長	徒三年	流三千里	絞監候	斬立決	凌遲處死
部民毆本属官	徒三年	流二千里	絞監候	斬監候	斬監候？

本節の小註で順治律（康熙本『輯註』）が監候斬と表記している。雍正律以後は斬監候と記され、こちらの方が普通である。しかし、このような転倒表記は、京都大学人文科学研究所蔵白玉堂本『大清律集解附例』にも見え、清初の版本にある形である²⁴。

第三節 若奴婢有罪（或姦、或盜、凡違法罪過皆是）、其家長及家長之期親若外祖父母不告官司而（私自）毆殺者杖一百、無罪而（毆ⁱ）殺（或故殺）者杖六十徒一年、当房人口（指奴婢之夫婦子女）悉放從良（奴婢有罪、不言折傷篤疾者、非至死、勿論也）。

乾隆律：i小註ではなく本文につくる。

本節は、家長による奴婢への鬪毆殺、故殺であるが、奴婢が有罪であるか無罪であるかによってその刑罰を変える。すなわち奴婢が有罪であるならば官に告発すべきなのであって、私的に処刑してはならない（輯註 26a, 11-14）。ただし、私的制裁による傷害が篤疾以下である場

合は、問題とされない（小註）。沈註は有罪であれば、家長、家長の期親・外祖父母は「義として懲治するを得」るからであるとする（24b, 17-18）。

奴婢が無罪で殺害された場合は、奴婢の同居する家族が解放される。『大明律附例』『大明律集解附例』ではその範囲を「奴之妻、婢之子」とし、小註では奴婢の夫婦、子女に拡大する。沈註はさらに積極的で、父母兄弟も解放すべきであるとする。なぜなら無罪で毆殺するとは虐待のきわみであるが、名分関係上、刑罰を加重することはできない、そのため同居の家族を解放するのである（25a, 3-8）。確かに祖父母父母が無罪の子孫を殺害した場合、同じ徒一年であるから（毆祖父母父母律）、加重しては、子孫と奴婢との刑罰上の均衡を失することになる。沈註の議論には一定の法理がある。しかし沈註は、有罪であっても、罪が軽微であるならば、家族は解放すべきであるとまでいい（25a, 9-12）、律の規定を踏み越えた主張をも展開する。このことを考慮するならば、沈註が一貫して奴婢に有利な主張をしているのは明らかである。これは、沈之奇の活躍していた頃、社会問題となっていた逃人問題が背景にあらう。旗人下の漢人奴婢（アハ）が逃亡するという逃人問題については、満人官僚、漢人官僚間で見解の相違があり、満人は重く、漢人は軽く刑罰を科する傾向にあった²⁵。沈註の議論は、後者の立場の法理を述べたものである。

第四節 若家長及家長之期親若外祖父母毆雇工人（不分有罪無罪）、非折傷勿論。至折傷以上減凡人（折傷）罪^a三等、因而致死者杖一百徒三年、故殺者絞（監候）。

明律：aなし。順治律：1小註につくる。

家長、家長の期親、外祖父母が奴婢を殴った場合は、奴婢が有罪か否かで分け、闘毆殺の段階で始めて刑を科す。一方、雇工人の場合は有罪無罪は問わず、折傷以上で刑を科す。この違いは、雇工人は労期が終われば家長と凡人関係であり、奴婢が終身奴婢であるのとは異なるがためである（輯註 26b, 1-2）。沈註は、篤疾になった場合は、義子と同じく財産を給付して生活を立ち行かせるようのべ、雇工人に有利な主張を行う（25a, 13-25b, 2）。

第五節 若（奴婢雇工人）違犯（家長及期親外祖父母）教令而依法（于^A臀腿ⁱ受杖去處）決罰、邂逅致死及過失殺者各勿論。

雍正律：A 於につくる。乾隆律：i 於につくる。ii 骸につくる。

本節では、家長、家長の期親・外祖父母が、奴婢・雇工人に対して懲罰権をもつことが前提である（沈註 24b, 17-18）²⁶。明初の『律條疏議』は、その理由を、奴婢は家長に対し敬い慎まなくてはならない、ことにもとめる²⁷。それに対する違反は懲罰となるが、その場合家長らは、臀部、腿部などの箇所には適切な杖責を行わなければならない。その上で不慮の傷害致死や意想外の殺害は免責である²⁸。本節の問題点は、第三節、第四節の規定との区別で、奴婢が有罪なのか教令違反なのか、懲罰が妥当（「依法」）であるか不当（「非法」）であるかの区別が微妙である。沈註は本節を、第三、四節の意を補足するものと位置づけるが（22a, 6-23b, 1）、実際の適用に当たっては斟酌せよというだけである（25b, 11-12）。

14) 妻妾毆夫

夫婦関係は家長奴婢関係と同じく義合であるが、その結合の仕方は異なる。奴婢は子孫に比擬されていたが、基本的に夫と妻は匹敵する関係である（「蓋夫婦乃敵體之親」沈註 30a, 6）。

そのため、奴婢より刑罰が軽減されている。なお夫婦間の問題については、戸律婚姻篇がさまざまな問題をあつかう。本律の本体は闘毆であるが、同時に離縁問題がからんでくるため、その範囲で婚姻篇の論理が入りこむ。

第一節 凡妻毆夫者(但毆即坐)杖一百、夫願離者聽(須^a夫自告乃坐)、至折傷以上各(驗其傷之重輕)加凡闘傷三等、至篤疾者絞(決)、死者斬(決)、故殺者凌遲處死(兼魘魅蠱毒在內)。

明律：a小註あり。順治律：1致につくる。

妻は夫を毆った段階で杖一百であり、これは凡闘の折傷相当である。よって折傷以上では凡闘に三等加重する。篤疾では、凡闘の流三千里が絞立決と死に入れられ、また闘毆殺絞監候が斬立決、故殺斬監候が凌遲處死に加重される。なぜなら、妻は夫を天とするので、夫を殴るとは天を絶つものだからである(輯註 30b, 2-3)。問題はさらに離縁させるかどうかで、これは夫の意思による。輯註はその理由を、離縁させるのは法であるが、離縁しないのにはさまざまな事情がある。事情に則して法は立てられるのであるから、法を盾に事情に背くのは認められない、という(30b, 3-4)。戸律婚姻篇出妻律の沈註によれば、夫婦関係とは、扶養行為(「恩」)によって結ばれ、理念(「義」)を共にし、それらを具体化した形式(「礼」)によって維持される(沈註 6, 19b, 1-2)。恩、義、礼は夫婦関係の三位一体構造であって、それが満たされなければ基本的に離縁である。たとえば七出は礼を満たしておらず²⁹、義絶は義が満たされないで離縁となる³⁰。しかし実際に離縁させるかどうかは、律によっても異なり一概には言えない(輯註 6, 20b, 4-9)。そのため夫の意向を聞くのである。妻による闘毆が夫の親告罪であるのもその理由による。夫、妻、妾の親告罪について沈註は言う。

夫と妻妾は寢室を共にし、関係(「情」)は法を超え、恩は義を超える。殴られた者が、日ごろの恩や関係を思い、辛抱して告発しないのならば、認められるべきであって、第三者がとやかく言う筋合いではない。よってそれ以外の親属については親告罪を言わず、この場合だけ言うのである。その意味は明らかである³¹。

これはいわゆる、「門内の治は恩を以て義を掩い、門外の治は義を以て恩を絶つ」である(名例律親屬相為容隱律沈註 1, 68a, 12-14)。

第二節 若妾毆夫及正妻者又各加(妻毆夫罪)一等、加者加入於死(但絞不斬、于^{Ai}家長則決、于^{Ai}妻則監候、若篤疾者死者故殺者仍與妻毆夫罪同)。

雍正律・乾隆律：Ai 於につくる。

妻 qī は齊 qí であり、夫と齊しい存在である。妾 qiè は接 jiē であり、夫と接見できるにすぎない。両者の間には貴賤の分があるのであって、それを紊すことはできない(戸律婚姻篇妻妾失序律輯註 6, 6a, 1-2)。また、妻にとっての夫を妾が家長と呼ぶのは、両者に区別があることを明らかにしている(「妾為家長族服之図」註)。家長という呼称は奴婢においても使われていたから、妻と妾の関係は、子孫と奴婢の関係と同じものがある。「妾為家長族服図」註では、妾が家長に対し罪を犯した時、妻と同じ刑罰を科せられる場合があるのは、名分のために厳しくしており、妻と異なる場合があるのは、微賤なために寛大にしているという³²。ここで名分という服制にかかわる概念が持ち出されており、妾が妻に比擬されていることがわかる。ただし刑罰上は妻より一等加重される。また、離縁に関する規定がない。夫と妻との関係が七

が七出といった礼制によって保護されているのに対し、妾は家長の私的情愛による関係であり、離縁は家長の一存によるためである（沈註 30a, 5 - 8）。

第三節 其夫殴妻非折傷勿論、至折傷以上減凡人二等（須^a妻自告乃坐）、先行審問夫婦、如願離異者斷罪離異、不願離異者驗（折ⁱ傷ⁱⁱ坐之）罪收贖（仍聽完聚）、至死者絞（監候、故殺亦絞）、殴傷妾至折傷以上減殴傷妻二等、至死者杖一百徒三年、妻殴傷妾與夫殴妻罪同（亦^b須妾自告乃坐）、過失殺者各勿論（蓋謂其一則分尊可原、一則情親当矜也、須得過失実情、不実ⁱ仍各坐本律）、（夫^{2a}過失殺其妻妾及正妻過失殺其妾者各勿論、若妻妾過失殺其夫、妾過失殺正妻当用此ⁱⁱ律、過失殺句不可通承上二条言）。

明律：a 小註あり。b 小註あり。順治律：1 真につくる。2 以下の小註なし。雍正律：A 以下の小註なし。

乾隆律：i 所につくる。ii 比につくる。

夫が妻を殴った場合、折傷未満は問題とならない。それ以上で刑罰を科すのは、夫婦の義が絶たれるからである（輯註 31a, 13-14）。しかし義絶であっても、関係を絶つ意志が無いのであれば、事実として二人は一体であり（「其情猶孚合」輯註 31a, 15-16）、離縁するかどうかは、両者の合意による。ところが、妻が夫を殴った場合は、夫の意志によって離縁が決まる（第一節）。輯註によると、夫は妻の主体（「綱」）であるから、妻は夫に従わねばならない。妻が殴れば罪に問われ、離縁は夫の判断による。夫が殴って折傷に至った場合、夫は義絶を犯しているが、妻の側には自分から夫と関係を切るという理はない（「而妻無自絶于夫之理」）。そのため両者の合意が必要である（31a, 18-31b, 6）³³。離縁が決まったならば、律どおりに刑罰を科し、妻は実家へ帰す。離縁しないならば、罪を收贖させる³⁴。

過失殺の場合どうするかについては、註釈書間で意見が分かれる。夫、妻、妾間の過失殺は刑罰を問わない、という寛大な説と、名分の上の者が下の者を過失殺した場合に限り問わない、という過酷な説がある。明律の註釈で前者を採るのは『読律瑣言』で、後者は『大明律附例』である。『大明律附例』によれば、「過失殺者各勿論」の前に圈がないので、この規定は本節にだけ適用され、第一節、第二節には適用されないとする。『大明律集解附例』も『大明律附例』側の説を唱えており、明代には解釈が割れていたことが伺える。清朝になると順治律は、律文の直後に挿入した小註によって『読律瑣言』説を採用する。そのため康熙本『輯註』では、それに基づいた輯註が加えられた。ところが、雍正律総註で『大明律附例』説が復活し、それを承けた乾隆律で、新たに「夫過失殺云々」という小註が附加された。そのため乾隆本『輯註』では康熙本『輯註』にあった註が削除されている。しかし、「蓋謂其一則分尊可原、一則情親当矜也」云々なる小註は、本来『読律瑣言』説に基づくものである以上³⁵、それが残されているのは、新たな小註とそぐわない。特に「一則情親当矜也」は、妻妾が夫を過失殺した場合、問題としないことの根拠であるから、意味不明となる。

第四節 若殴妻之父母者（但殴即坐）杖^{a1}六十徒一年、折傷以上各加凡鬪傷罪二^{b2}等、至篤疾者絞（監候）、死者斬（監候、故殺者亦斬）。

明律・順治律：a1 杖六十徒一年は杖一百につくる。b2 二等は一等につくる。

女婿による妻の父母への鬪殴は、明律・順治律では杖一百であったのが、雍正律で一等加重され徒一年とされた。妻の父母は總麻である（妻親服図）。一方、殴大功以下尊長律では總麻兄弟が杖一百、尊属は一等加等とある。すなわち本宗との対応関係からすれば、雍正律におい

て妻の父母が緦麻兄姉から緦麻尊属相当に格上げになったことになる³⁶。そもそも明律において妻の親属は、母親の親属である外親に比べ服が軽く、重視されていなかった³⁷。しかし、満洲族において妻親は重要であったから³⁸、雍正律で格上げされたのであろう。事実、雍正律総註では「妻の父母は服は軽いが、関係（「情」）は重い」³⁹とのべる。

15) 同姓親属相殴

以上で親属に比定された義合関係にある者との闘殴は終わり、親属間の闘殴となる。本律は、本宗の同姓親属ではあるが、服制関係のない者（袒免）との闘殴で、以下の諸律の原基を示す。

凡同姓親属相殴、雖五服已尽而尊卑名分猶存者、尊長^a（犯卑幼）減凡闘一等、卑幼（犯尊長）加一等（不加至死）、至死者（無論尊卑長幼）並以凡人論（闘¹殺者絞、故殺者斬）。

明律：a 者につくる。順治律：1 殴につくる。

『輯註』説は、基本的に『大明律附例』の引き写しであるので『大明律附例』によると、袒免親は、系譜上尊卑の名分が存するために凡人とは異なる⁴⁰。また『律條疏議』では、凡人と異なる所以を称呼が存するところに求める⁴¹。他者と己が親属関係にあるか否かの実体的基礎は、出生・養育の事実を除けば、系譜、称呼に求められるといえる。系譜はどの親属にでも備わっているものではないから、重要なのは親属称呼「名」の方であり、それが端的に尊卑の名分を表す。そこで問題となるのは、称呼（「名」）とその刑罰上の実質（「分」）との論理連関であり、異姓で称呼ある者の処遇である。

名分は、殺害時に問題となる。同姓無服の親属間の尊卑は、刑罰上、凡人との刑罰差一等で示されるが、殺害した場合は、一般人とみなして刑罰を科す。輯註によれば、その罪が重いからである（32b, 2-3）しかし、罪が重いなぜ親属関係が考慮されないのかについては説明がない。それを説明するのは『律條疏議』で、両者にはそもそも密接な関係がないのだから（「既無深切之情」）、人命の方を重んじるべきであるという⁴²。また雍正律総註は次のようにいう。殺害者は五服の外にいたのであるから、死には死罪をもって臨むのではあるが、卑幼が尊長を闘殴殺した場合、篤疾以下のように一等加重するわけにはいかない。さりとて関係も義も絶たれているのだから（「情義既絶」）、尊長が卑幼を闘殴殺した場合、篤疾以下のように一等軽減するわけにもいかない。よって尊卑、首従を論ぜず、すべて一般人とみなして刑を科す、という⁴³。つまり、親属称呼（「名」）には、実質的な関係性（「情義」）の存在が求められるのであり、それが満たされた時、名に相応しい刑罰上の実質（「分」）が認められるのである。袒免では疎遠すぎて実質的關係が認められず、人命のような重大案件の場合、親属関係は阻却されてしまうのである。

しかし称呼、実質的關係があっても、同姓とは限らない。たとえば母親の一族である外親、妻の一族である妻親との闘殴がそうである。服制上は無服の者が多いのではあるが、彼らもやはり親属（「異姓五服之外親」『律條疏議』）である。彼らの「分」はどうなるのか。そのため明律以来、異姓無服の親属との闘殴をどうするかという法的関心があり、『律條疏議』では凡人あつかいを主張する⁴⁴。これは律に即した原則論である。しかし『大明律附例』では親属としての「分」を考慮し、母方の伯叔父の妻（舅妻）への闘殴は、折傷未満なら不応為律に問い、折傷以上ならば本律に比照して加等することをいう⁴⁵。このような関心を引き継ぐものとして沈註があり、そこでは伯叔母の夫（姑夫）、母方の伯叔父の妻（舅妻）への闘殴をとりあげる

(32a, 11-14)。沈註がわざわざ『大明律附例』であつかわない姑夫をとりあげているのは、姑夫を殴る己は、出嫁した姑と大功と重い服制関係にあるからであろう。つまり姑夫とは姑を介して実質的な関係が推認しうるのである。ここでも称呼（「名」）が、実質的關係をまっぴら、それに相応しい刑罰上の実質（「分」）を及ぼす、という三位一体の論理構造を見て取ることができる。

注

- ¹ そのため一般人の家では奴婢をもつことはできない。戸律戸役篇立嫡子違法律。
- ² 「男女縁坐而為奴婢、與無罪良民不同。則其毆豈可與凡民概論哉。」
- ³ なお本律および次の奴婢毆家長律には、社会経済史、身分制の観点から多大な研究業績がある。詳しくは高橋芳郎『宋一清身分法の研究』北海道大学図書刊行会、2001年を見よ。
- ⁴ 「死則絞抵。彼雖奴婢、與我実凡人也。賤其人、不可賤其命所輕者。」（沈註 21b, 5-7）
- ⁵ 「蓋毆則有貴賤之分、財物無貴賤之分也。」これは雍正律本条の総註でも踏襲される。「蓋毆可分貴賤、相侵財物不可分貴賤也。」
- ⁶ 「然此自他人奴婢言之、雖有貴賤、無大名分。若緦麻小功親之奴婢、則有名分以相事使者。」
- ⁷ 「蓋内外親屬之奴婢亦有名分與他人奴婢不同。」
- ⁸ 「（唐）律内奴婢等於畜産之處、尤不一而足。可見奴婢原不齒於人類。良人殺死者、亦無実抵之法。今則大不然。」
- ⁹ 君臣関係は本源的統属関係である本管関係である。本管関係については、鬪毆篇毆制使及本管長官律が規定する（拙稿『大清律考釈』（三）参照）。
- ¹⁰ 「奴婢乃有罪縁坐之人、給付功臣之家者也。常人之家不当有奴婢。按祖父売子孫為奴婢者、問罪給親完聚、是無罪良人、雖祖父、亦不得売子孫為賤也。由此觀之、常人服役者但應有雇工、不得有奴婢。故今之立売身文契者、皆不書為奴為婢、而曰義男義女。亦猶不得為奴婢之意也。然今問刑衙門凡売身與士民之家者、概以奴婢論。不復計此矣。」
- ¹¹ 石橋秀雄「清初のアハ（aha）－特に天命期を中心として」「清初のアハ（aha）－特に太宗天聰期を中心に」（『清代史研究』緑蔭書房、1989年）
- ¹² 奴婢毆家長律第一条例、第二条例、第五条例。うち、第一と第五条例がアハに関する規定となる。第一条例「凡旗員將奴婢責打身死者……」は、『大清律例通考』によれば、国初の「凡本主私殺家僕者、鞭一百、追入入官」が元規定である。笞ではなく鞭とあることから、これは旗人によるアハ殺害の規定である。清律の世祖序に「朕惟太祖、太宗創業東方、民淳法簡、大辟之外惟有鞭、笞」とある。その後康熙年間のような関連規定を経て、雍正年間に欽定例となり、乾隆五年に改定された。第五条例「凡八旗官員平人將奴婢責打身死者……」は、同書によれば、雍正五年に律例館が奏准した欽定例で、額爾登額が家人の納松額らを打死した案件にもとづく。
- ¹³ 良賤相毆律増例「凡奴僕毆辱職官者、家長笞五十、係官、交該部議處。」増例とは、康熙年間の『見行則例』に由来する条例である。
- ¹⁴ 「凡漢人家生奴僕、印契所買奴僕并雍正五年以前白契所買及投靠養育年久、或婢女招配生有子息者俱係家奴、世世子孫永遠服役、婚配俱由家主。仍造冊報官存案。嗣後凡婢女招配并投靠及買奴僕俱写立文契、報明本地方官鈐蓋印信。如有事犯驗明官冊印契、照例治罪。」これと関係が深いのは、義子についての乾隆本『輯註』毆祖父母父母律第二条例である。
- ¹⁵ 乾隆本『輯註』奴婢毆家長律第七条例。これは、雍正律奴婢毆家長律の第三欽定例の字句を若干改めたものである。満洲主僕例に即するとは、たとえば次のような規定をいう。「其奴僕誹謗家長、并雇工人罵家長、與官員平人毆殺奴僕、并教令過失殺及毆殺雇工人等款、俱有律例、應照満洲主僕論。」
- ¹⁶ たとえば『大清律例通考』奴婢毆家長律第十五条例「凡民人毆死贖身放出奴婢及該奴婢之子女者、杖一百徒三年。毆死族中奴婢、杖一百流三千里。若係官員、亦照旗員之例辦理。」これは乾隆四十三年の

条例である。一方『読例存疑』同律第五条例で薛允升は「庶民之家、不准存養奴婢、律有明文。此例標出民人二字、是庶民亦准存養奴婢矣。與律意不符」といい、奴婢の本規定が清末段階でも生きていたことを知る。

- 17 「逆天罪大、法不容寬。正犯凌遲、無可復加。乃緣及其所親所密。……若此等男子年十五以下、及正犯之母、女、妻妾、姊妹、子之妻妾、幼小婦女、均無知識。故待以不死、皆給付功臣之家為奴。」
- 18 「奴婢已轉賣與人、而謀旧家長者、以凡人論。奴婢原係凡人、止以名分所係而重之、非子孫比也。既轉賣他人、得其身價、名分已無、恩義并絶。非凡人而何。」
- 19 たとえば乾隆本『輯註』毆祖父母父母律第二条例「凡義子過房在十五歲以下恩養年久……。」
- 20 「名者名分之尊、義者恩義之重。子于父母、孫于祖父母、妻妾于夫及夫之祖父母父母、名分恩義最尊至重。縱有過惡、義當容隱。乃竟告發其罪、是滅絶倫理矣。」
- 21 謀殺祖父母父母律については、拙稿「大清律輯註考釈」（一）参照。訴訟篇干明犯義律第四節でも、奴婢が家長を告發した場合は、「與子孫卑幼罪同」という。
- 22 「奴婢雖無倫理、而名分重則與子孫不異矣。」倫理とは親屬間の秩序である。註 20 参照。
- 23 「而奴婢過失殺家長、坐以絞罪何也。蓋子孫天屬、宜多恭謹、故從輕以矜其誤。奴婢人合、易生輕忽。故從重以嚴其防。」
- 24 本律と前律について対校しただけであるが、康熙四十五年の『大清律例硃註広彙全書』では転倒していないことから、康熙年間後半におこなわれた律修訂作業の最中に改められたと考えられる。康熙本『輯註』は康熙五十四年序と新しいが、沈之奇の持っていた底本が古い版本だったために、このような表記が残ったのであろう。
- 25 拙稿「督捕則例の成立—清初の官僚制と社会—」『史林』72—2、1989年、26～27頁。
- 26 懲罰権については、刑律闘毆篇毆祖父母父母律、訴訟篇子孫違反教令律を参照。
- 27 「謹詳律意、……然奴於長、須當敬慎。尋常過失尚且不可。況傷殺乎。」
- 28 明初の『律條疏議』では「所以別貴賤、正名分也」と客観主義的な理由を、雍正律総註では「俱無欲死之心、故各勿論」と主観主義的な理由をのべる。
- 29 七出とは子供ができない（「無子」）、浮気（「淫佚」）、舅姑との不仲（「不事舅姑」）、おしゃべり（「多言」）、盗み（「盜窃」）、嫉妬（「妬忌」）、難病（「惡疾」）である（出妻律小註）。
- 30 義絶は、夫婦の扶養（「恩情」）・夫婦関係の趣意（「礼意」）に乖離するところがあることである。「義絶者、謂于夫婦之恩情礼意乖離違礙、其義已絶也。」（戸律婚姻篇出妻律輯註 6, 20b, 2—4）。
- 31 「夫妻妾相毆、皆註自告乃坐。蓋夫與妻妾同处閨房、情可掩法、恩可掩義。被毆者或念平日恩情、願忍受而不發、亦當聽之。非他人所得參其說也。故其他親屬皆不言自告乃坐、而此独言之、其義可見。」（30a, 11—15）
- 32 「妾與家長相犯、有同于妻者、以名分而嚴之也。有異于妻者、以微賤而寬之也。」
- 33 輯註説は、『大明律附例』を襲ったものである。
- 34 本節については、『大明律集解附例』纂註が詳しい。「如能懲忿相宥、不願携離者、則驗其夫折傷應坐之罪、全准收贖、以與完聚。情義未斷、復順其情也。要皆所以全夫之綱也。」收贖については、『読律佩觿』卷二、收贖、『大清律輯註』首卷、納贖諸例図の註をみよ。收贖には多くの法的意味があるが、この場合の收贖は『読律佩觿』にいう「一應輕贖」である。『律條疏議』に「而收鈔以贖」とある。同様の用例は、人命篇戲殺誤殺過失殺傷人律にもみえる。
- 35 『読律瑣言』「如夫過失殺妻妾、妻過失殺妾、與妻妾過失殺傷夫各勿論。一則其分尊在所當原、一則其情親在所當矜也。」
- 36 妻の父母が尊屬あつかいでないことは、康熙本『輯註』の沈註で指摘されている。
- 37 妻の父母が単なる緦麻尊屬より優遇されるのは、名例篇親屬相為容隱律と刑律訴訟篇干名犯義律である（妻親服図註）。
- 38 杉山清彦「清初正藍旗考—姻戚關係よりみた旗王権力の基礎構造—」『史学雑誌』107—7、1998。同「八旗旗王制の成立」『東洋学報』83—1、2001。
- 39 「妻父母服輕而情重。」

- 40 『大明律附例』「凡本宗同姓袒免親屬相毆、雖五服已盡、族戚疎遠、而其世系之尊卑名分猶存、終與凡人不同。」
- 41 「謹詳律意、服制雖盡、称呼尚存。比與凡人宜加少異。」『読律瑣言』は註を欠く。
- 42 「至若毆而至死、彼此俱依凡人。既無深切之情、宜以人命為重。」
- 43 「凡同姓親屬雖在五服之外、而世系之尊卑名分猶存。終非凡人可比。故尊長毆卑幼得減凡鬪罪一等。卑幼毆尊長、則加凡鬪罪一等。罪止滿流、不加至於死。若毆至死者、則以凡人論。蓋已在五服之外、罪至擬抵、無可加增。情義既絕、不得更減。故不論尊長卑幼為首為從、並以凡人科斷。」
- 44 「觀此、則異姓五服之外親相毆、其與凡人同科明矣。」
- 45 「問曰甥毆舅妻、律無文、何斷。答曰、非折傷、止問不応。至折傷以上、比同姓親屬五服已盡而尊卑名分猶存者、加等。」